

# 師の背中

8

一川



## 一川格治

(いちかわかくじ) 明治44年11月26日、熊本県八代に生まれる。旧制八代中学校時代、澤友彦範士、大野操一郎範士らに指導を受け、卒業後、熊本県警に奉職。県警時代は鶴田三雄範士、坂口静夫範士らに師事。停年退職後は熊本武道館剣道師範として後進を指導、熊本県剣道連盟理事長、熊本県武道振興会事務局長などを歴任。昭和9年天覧試合に出場、翌10年には全国青年済武大会で団体優勝を飾ったほか、30、31年に全国都道府県対抗大会(団体)連続優勝、33年全国七段指定選手権出場、35年全国八・七段指定選手権出場など活躍した。また、古流の世界でも功績を残し、野田派二天一流の第十七代を継承し、同流の普及に努めた。59年4月7日逝去。享年73歳。

私には兄二人と姉一人がいる。全員が武道に携わっているが、末っ子の私は地元鎮西高校に勤めたため、父と関わる時間が兄弟の中でもっとも長かった。父・格治は、私にとって父というより「師匠」という色合いが強かった。家と武道館との行き帰りに剣道のことを教えられ、話し込めば、父と兄弟車座になったまま夜中の三時を過ぎてしまうこともしばしばだった。

父は食事をしながら読書をするほどの勤勉家だった。また、小川忠太郎、堀口清、玉利嘉章といった大先生方と十歳ほど若い父が親密な間柄だったのは、「古流」という深く学ぶべき題材を共通して持っていたからだだろうと思う。若い頃、私は剣道談義の狭間で「五五の十」やら「二八の十」といった単語を並べて大笑いし合う父たちの話を、漠然と聞いていた。もちろん当時はおよそチンプンカンプンだったが、今この年になると、当時の難解極まりない話も大分水解するようになってきた。その手助けとなったのは、父が数々の教えや人生訓を書き留めた膨大な書類だった。書くことが好きだった父は、熊本武道館の師範として、教えを文書にまとめて配ったり、自らのノートにもさまざまな剣道訓を書き溜めていた。と

きには紙の切れ端にサッと教えを書いて手渡すこともあったが、そうした紙片も含め、残されたそのすべての文字が、父亡きあととも私を支えてくれている。

父は決して人を叱ることがなかった。私に対しても「それはダメだ」と言ったことはなく、むしろ何につけても肯定した。私が教員となった頃、「指導者はスポンジにならないといけない」と言ったのは、「人の言うことを全部吸い取って、決して吐き出してはいけない」という意味があった。実際、私が試合で負けても父は口癖のように「良かった、良かった」というばかりだったが、負けているのだから良いはずはない。「何が良かったのですか？」と訊ねれば「構えが良かった」と微笑んでいた。

私が三十代になった頃には、私の壮大な妄想をも肯定した。ある日、単車で高台にあがった私は眼下の街の灯にいたく感激し、あるひらめきとともに「これが剣道だ」という悟りを開いた。そのことを一目散に知らせると、父はやはり「そう、そう、よくそのことに気づいたな」と、にこやかに応じてくれた。三日後には私の熱情も冷めているのだが、父はその時その場では私の熱を冷まさずとはし



いちかわはじめ 昭和22年1月1日生まれ、52歳。熊本県熊本市在住、教士七段。熊本県・私立鎮西高校卒業後、国士館大学へ。その後、母校・鎮西高校の教員を現在まで30年間務める。昭和49年熊本県代表として第22回全日本選手権に出場した他、全国教職員大会(20回出場)、全日本東西対抗(6回出場)などで活躍。国体では今年の熊本国体を含めて過去6回「少年」の監督を務め、優勝3回(昭和63年京都、平成10年神奈川、11年熊本)、2位2回(元年北海道、9年大阪)、3位1回(2年福岡)の成績を残す。(撮影◆川村典幸)

# 懐深く、何ごとも受け入れてくれた父。 家庭にも稽古にも「対話」があった。

なかった。どんな些細なことであれ、人の話の腰を折るとか、人の鼻っ柱を折るといふことは決してしなかった。

「剣道は二十代でやるべきこと、三十代でやるべきこと……五十代でやるべきことがあるからそれを確実にこなせばいい。それまでになんとか目鼻がつけば、六十くらいに剣道が円熟してくるだろう」と父はよく言った。そうは言っても二十代の頃、試合が弱かった

私は、負けてばかりの剣道に嫌気がさし、父にどうしたら試合に勝てるか訊ねたことがあった。父の助言は簡潔だった。

「千人と試合をすればいい。そうすれば、試合が分かるだろう」私は高校の頃から父の勧めで稽古日誌を付けていた。日誌は、いつどこで誰と稽古をしたかを書き並べたもので、父自身もそれを付けていた。ノートには試合をしたことも記してあり、それまで試合をした延べ人数は五百人程度だった。もう五百人と試合をすれば勝てるようになるかと父は言う。父の助言どおりどんなに小さな大会にも出場し続けた私は、いつの頃からだったか急に勝率が上がった。振り返ればなるほど「千人」が分岐点だった。その頃から勝率は五分となり、「千百人」を超えたくらいには、勝ちが多くなった。

それでも、私は父には勝てなかった。晩年、大腸ガンとの闘病生活を終えて間もない父と稽古をしたことがあった。父は痩せ衰え、私は父の入院中も休まずに稽古を続け、気力横溢の時を迎えていた。それまで数十年間打ちのめされ続けてきた私は、病後といえども容赦なく打ち込む腹づもりでいた。しかし……。もの見事に返り討ちにあった私は、そのときほど「剣道とは何だろうか」と思ったことはない。面を打ってくる父の竹刀が明らかに見えていても打ち込まれてしまふ。不思議も味わった。この先、自分が剣道が続いていく上で考えるべきことは、技術でも体力でもない、別な「何か」であることを痛感した。

それから数年後の昭和五十九年三月三十日、熊本武道館でのその日が父との最後の稽古となった。私は稽古の最後には必ず父にかか

るようにしていた。大勢が見守る中での「一本勝負」。面を狙って打ちかかろうとした私の起こりに、父は軽やかに小手を放った。父の竹刀が私の甲手に吸い付くような、なんともいえない感触が今も残っている。その二日後の四月一日、予兆もなく父は倒れ、それから六日を経た四月七日、脳出血により還らぬ人となった。

冒頭、朝方まで剣道を語り合ったことを記したが、父は実に話術巧みだった。こんな父の思い出もある。

熊本県警に奉職してから父は武術教員養成所出身の鶴田三雄範士に師事した。当時、地域の大会を総なめにしていた父は、ある勝ち抜き戦の大会を一人で抜ききったことがあった。その試合、父は終盤、上段をとって相手を叩いたという。それが鶴田範士の逆鱗に触れた。「誰が上段をとれと言ったか」。鶴田範士はその場で賞状を破り捨てた。対する父も若い頃は気性が激しく、その場で剣道との絶縁を申し出、竹刀を折って火にくべた。しかし、三日もすれば父も剣道がしたくてしかたがない。鶴田夫人があいだを取り持つと、がんとして破門をとかなかった鶴田範士もようやく条件付きに父の復帰を許した。条件は「一年間、切り返しとばかり稽古のみ。地稽古、試合は一切禁止」というものだった。父はやむなく受け入れ、それを忠実に守った。そして、迎えた京都大会。父はそこで一敗地にまみれた。試合後、父の中に沸々と怒りがこみ上げた。「オレがこんなに下手になったのは鶴田範士のせいだ。怒りに打ち震え、武徳殿を出ようとしたとき、当時の大先生方に父は呼び止められた。「あなたはどこの方ですか?」「熊本です」「どなたのお弟子さんですか?」「鶴田先生です」「そうでしょう。素晴らしい試合ぶりでした」。父の目から鱗が落ちたという。自分の浅はかさに気付く、鶴田範士に心底謝罪し、そして、感謝した。

「あのまま、試合」に走っていたら、今の自分はなかった。私の高慢ちきな鼻をへし折って、剣道の上台をつくらせてくださった鶴田先生は、「恩師」以外の何ものでもない。そう父は語っていた。

